ISSN　1342-4866

山形大学附属博物館報35

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY　　２００９．３

目　　次

館名改定30周年「結髪土偶」を館のマスコットに …… 丸　山　俊　明（１）
御手本類の整理をして …… 石　島　庸　男（３）
資料紹介 ― 為本 自治雄《静物（水仙）》 ― …… （４）
「天地人」　Information Desk …… （５）
平成20年度事業報告 …… （６）

館名改定30周年 「結髪土偶」を館のマスコットに

丸　山　俊　明（附属博物館館長）

館のお土産がほしい。本学のお土産として、学長煎餅やワイン、湯飲みや枡が大学生協で販売されているが、館としてはいきなりそこまでは追いつけない。ならば、館に来てくれた小学生や引率の先生に持ち帰ってもらう記念の品をまず作りたい。まだ見ぬ恋人に会いに行きたくなるような誘引効果のある品、訪ねた思い出を呼び起こすきっかけとなるような手頃な品がいい。しかもそれは、遠く離れていても館を想いつつロマンが膨らむ品、そしていつでも身近にあって館へといざなう夢の詰まった品でなければ。そんな万能の広告グッズはないものか…。館長になってからおかげ様で間もなく二年、この願いを「ガイドブック＋クリアファイル＋シール」の広報セットという形で実現するに至った（写真１）。

写真1　ガイドブック、クリアファイル
そしてシールのお土産３点セット

大学の中にあっても地域の方々に気軽においでいただけるような博物館をめざしたいという思いから、館のキャッチフレーズはここ数年「地域文化の伝承館」に落ち着いている。郷土の文化を大切に受け継ぐという思想は、館の前身である山形師範学校の郷土室から一貫しており、昭和27年に博物館相当施設に指定されて総合博物館となった今でも変わることはない。収蔵展示資料は自然科学から人文分野まで幅広く、古文書を多く所蔵している点が本館の特長であり、この館の良さはこれまでもリーフレットによって宣伝広報されてきた。しかし、これだけでは何かしら物足りなさを感じていた。辺りを見まわせば、学芸研究員や事務の方々が長年さまざまな広報誌に紹介してきた所蔵品の記事が蓄積されているではないか。そこでさっそく、原著者の方々にお願いしてこれらの記事をブラッシュアップしていただき、新たに収蔵された作品には解説を書いていただくことにした。原稿は、みなさまの御理解と御協力のもと順調に揃い、出版予算に学長裁量経費を充当して一冊のガイドブックに仕立てた次第である。

平成20年は、博物館の名称が昭和53（1978）年に現在の山形大学附属博物館になってからちょうど30年目の節目にあたる。この好機を逃すまいと、ガイドブックと抱き合わせでクリアファイルとシールも作製することにした。改名30周年の記念事業として館の知名度を上げ、来館者への知的サービスの向上を具現化するためのお土産３点セットを企

画したわけである。と、ここまではよかったが、ガイドブックの表紙やクリアファイルとシールのデザインをどうするかで悩んだ。館の売りは何か。本学を、地元山形を象徴するような収蔵品はどれだろうと考えるうち、館のマスコットを決めることになった。マスコットとは、幸運をもたらすお守り（lucky charm）として身近において大切にするもので、多くは人形や小動物が用いられるとのこと。館を代表するもので、不思議な力を感じさせ人々を引きつけるものはないか。そもそもマスコットの語源は中世ラテン語の魔女（masca）に通じるというから、男性よりは女性の方がいいに決まっている。

すぐに、もってこいの収蔵品が見つかった。結髪土偶である（写真２）。土偶とは、土をこねて形

写真２
結髪土偶

を作ってから焼き上げた人形、すなわち土人形のこと。世界的には新石器時代以降の農耕社会に多産し、日本では縄文文化を特色づける遺物で東日本に多い。たいていは女性をかたどったもので、子孫繁栄や豊饒などの呪術につかわれたらしく、じつに縁起がよい。これならきっと博物館の人気者（mascot character）として開運のお守りとなり、人々を魅了するにちがいない。本館の土偶は髪の毛に特徴がある。左右対称に髪を分けて結い上げているようにみえるところから結髪土偶と呼ばれている。残念ながら脚部が欠損しているが、そのせいで腰から胴体部分が空洞になっていることが確かめられる。このような構造の土偶は中空土偶というそうだ。産地は寒河江市の石田遺跡で、寒河江駅の南方に位置し、ＪＲ左沢線の石田踏切近くにあって、縄文晩期から弥生時代の土器や石器が多数出土している。まさに、郷土に根ざした文化を守るという館のスローガンにぴったりの品である。

結髪土偶がマスコットに決まりお土産グッズができたら、ここは一気呵成にお披露目をしようとの声があがった。変革を続ける本学をよりいっそうアピールするには何をしようか。街の中を動く大きな広告塔を使わない手はない。「博物館はここにあり」とばかりにラッピングバスを走らせることにした。ラッピングバスは、山形市北部の県立中央病院から市役所や鉄砲町を経て、南のウェルサンピアまでの路線を走る（写真３）。はじめは山形－仙台間の高速バスをターゲットにして仙台駅前で県外の大勢の人にも見てもらおうと意気込んだが、高速路線ではラッピング広告は扱っていないという。走行期間は３ヶ月、１月の大学入試センター試験の前から４月の入学式の後まで。費用は今年度の組織評価で頂いたインセンティブ経費で賄える。できればバス全面に塗装したかったが、1年間の高額契約になるためとても算段がつかない。そこで、広告の面積を車体の左右両面に限り、山形大学附属博物館の文字とマスコットの結髪土偶を背面も含めてデザインした（写真３と写真４）。文字とマスコットが浮き立つようラッピングの素地を白抜きにしてみたが、はたして効果は如何に。

今後は、結髪土偶の認知度アップ作戦として、ニックネームを決めたあとに“ゆるキャラ”を創りたい。来館記念のスタンプはもちろん、ストラップ・マグカップ・下敷き・Ｔシャツ・キャップなどのキャラクターグッズが開発できればいうことなし。いずれは、ゆるキャラの縫いぐるみや着ぐるみもほしくなるだろう。他館に負けず劣らずの品格あるキャラクターに育てたいものだ。結髪土偶は、その素質十分。県立博物館の縄文のヴィーナス（舟形町西の前遺跡出土、高さ45cmの八頭身美人）や山形大海牛などと互角に渡り合える御婦人である。やがては、ディーオ（モンテディオ山形）やかねたん（大河ドラマ「天地人」米沢市推進協議会）と肩を並べ、県民のみなさまに可愛がられる親善大使として、山形県と山形大学を日本全国に発信してくれることを期待してやまない。

結髪土偶、デビューおめでとう！　活躍を祈る。

写真3　ラッピングバスの車体左側面

写真4　ラッピングバスの車体右側面、
土偶の背面もご覧あれ

御手本類の整理をして

石　島　庸　男

寺子屋や私塾等で、師匠が筆子や弟子たちに直接書いて与えたものを綴った冊子を、「御手本」という。内容の種類は数万とも数十万あるともいわれている。退職したら整理や目録化を手伝うからという約束で、週１～２回気の向いた時に博物館にフラッと訪なうが、思ったより大変…というのは、御家流の字がよく読めず、従って手本の内容が特定できないものが続出したから。偶々来館されていた地域教育文化学部の伊藤清郎、宮島両先生、人文学部の岩田、松尾両先生、さらに同じボランティア仲間の横山、森谷先生方、そして高橋学芸員に忙しい中教えていただく。総合大学のありがたさだが、手本を持って研究室まで行くのははばかった。博物館主催で古文書講座を、市民向けに開いてほしいと願っている。

また、読めても何往来か出典がわからない不勉強さを恥じた。往来物（寺子屋の教科書）の大系で17冊本あるのだが、この分野は研究対象として来なかったため苦しい。

さて、刊本（版本）の研究は進んでいるものの、手書き手本の方は珍しいものだけだ。

いづれどなたかがと思って、また研究費が余り？、会計が困るというので、丁度、市内の二つの古本屋が店じまいをするのにあわせ、この手のものを全部買い、博物館に移管したのだった。私の少し持っていたものとあわせ整理してみたら、248点もある。珍しいものとしては、ＮＨＫ大河ドラマで出てくるであろう「直江状」の御手本化した写本や、寛永白岩一揆の訴状の同類のものなどが現れたのにはびっくりした。直江状は偽文書説もあるが、タイトルがなく、なんと森谷学芸員にコンピューターで検索してもらう。この書状の日付から50年後には、大坂の一書肆から往来物として出版され、よくも禁書とならなかったなあと感心する。山大の直江状は、この往来物とは違う系統の写のようだ。もちろん一枚ものの、普通ならゴミとして始末されてしまうようなシロモノもあり、雑多な五味群ではある。

一年有余もかかるとは思っていなかったが、やっと年末に「仮目録」を作ることができホッとした。しかし「仮」にすぎない。

おかげで、読み書きそろばんと簡単にいわれる寺子屋（私塾は捨象）の教科内容が、これほど多岐にわたり、さまざまあるのを実感でき、近世の農工商の教養の広さ、ものを知りたい学びたいという欲求のすごさを知らされた次第である。

山大の博物館、図書館には＊＊家文書群が200近く所蔵されていると思うが、形態からいって、いわゆる「御手本」の分類は成されていないようで、いつか片っ端から見てみると、新たな手本類としてもよいものが多数出てくるのではないだろうか。

ただ、また草書体とすぐつき合う勇気はないので、しばらくは課題の一つにしたい。ボケはじめているので、学内で会うようなことがあれば、アァ思い出したらしいと思って下され。

なお、興味のある向は「紙魚」48・49号（博物館にあり）に、整理しての感想文を書いているので御覧あれかし。

（附属博物館ボランティア）

資　料　紹　介

為本 自治雄《静物（水仙）》

カンヴァスボードに油彩
40.5×30.3 cm、昭和30年頃

「四十年前君が撞きたる明けの鐘、
　　山形洋画壇に暁つげしその鐘の音よ」
　　結城哀草果

山形近代洋画界の幕開けは、為本自治雄（ためもとじちお）の名前抜きでは語れない。大正11（1922）年、この地方では初めての公募展を行なう洋画サークルが結成された。その名を〈毒地社〉という。山形工業学校の図画教師であった為本と山形師範学校の同じく図画教師、小塚義一郎を中心に、当時山形高校の学生であり後に高名な美術評論家となる今泉篤男、洋画家の奈良村正史、逸見誠一、師範学校の学生だった石沢健吉の６名で結成されていた。同年9月30日から10月２日まで山形市役所２階にて開催された第1回展の様子は参考文献に詳しいが、実に大盛況だったようである。椿貞雄や横山潤之助ら中央で活躍する画家を迎えながら、昭和３（1928）年、小塚が県内の美術教師らとともにおこした「向陽会」の結成によって事実上その名が消えるまで、個性の尊重や表現の自由を求めていた青年達の憧れであり、県内の文化に刺激を与え続けた。〈毒地社〉という名前は、「山形の土地は毒々しく見える」という為本の一言からつけられたという。

為本は明治34（1901）年石川県金沢市に生まれ、６歳で先祖代々の土地である高知県高知市に帰住した。大正８（1918）年、県立中学海南学校を卒業後、京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）に進学。そこで浅井忠の流れを汲む間部時雄、霜島之彦、黒田重太郎らに師事した。大正11（1921）年、卒業と同時に山形県立山形工業学校の図画教師として着任する。昭和36（1961）年、退職。昭和38（1963）年、病気のため逝去した。冒頭の句は護国神社の平和記念館で行われた告別式にて結城哀草果が詠んだ弔歌である。土佐人である彼が山形に就任したのはほんの偶然からであったというが、以後40年間山形の地を離れることなく、美術教育に従事しながら作品を発表し続けた。

毒地社の結成と時を同じくして、為本は山形県師範学校前、梅林内の小林爲次郎別邸に移住している。表札代わりにカリカチュア風の自画像を掲げ、「為本の巣」などと称しており、ボヘミアン風の格好と長身長髪がトレードマークだったなどとその魅力的な人柄を語る逸話は尽きない。妻のひてよと共に音楽、自由律俳句、詩、演劇、舞踏などにも造詣が深く、自宅には画家仲間、俳句仲間、様々な文化人が集ったことから、サロンのような様相だったらしい。後に石川島播磨重工業会長となる田口連三は山形工業学校にて為本の薫陶を受けた一人だが、彼が当時の多感な青年達に慕われていた様子を詳しく語っている。

第１回毒地社展に出品した自画像などに見られるよう、当初の作風は前衛的・抽象的な傾向にあったようだ。椿貞雄や岸田劉生へ傾倒した作品もあるが、京都で師事した間部や黒田を通じて後期印象派の影響を色濃く受けていたのだろう。主観的な立場から造形美術への探究心を持ち続けた。大正15（1926）年、春陽会第４回展に初入選した代表作≪北国秋景図≫からは、日本的自然美を洋画で表現しようとする試みも見受けられる。また、昭和期を通じて国画会にも多数入選。戦後は昭和21年、山形県美術家協会の運営委員長に選出されるなど県美術界の復興に力を注いだ。まさに山形の戦前戦後を通じて、文化の指導者として無くては

ならない存在であった。

さて、作品に目を向けてみよう。白い壁を背景に片手付きの花器に生けられた水仙が描かれている。画面上部は花をほんの少しだけ切ってトリミングされており、花器は若干左に傾いて描かれている。水仙の黄色と緑、花器の青。しかしその色調は毒々しくなく、落ち着いた筆致と共に画面は穏やかな調和に満ちている。左下に縦書きで「為本画」と記されており、作者のご家族より昭和30年前後、おそらくは30年以降のものであろうとの確認を得た。

本作は平成19年夏、６点の美術資料と共に理学部から管理換えとなり当館に収蔵された。他の６点の中には奈良村正史のデッサン≪蔵王遠望≫も含まれており、既に当館で所蔵していた小塚義一郎の作品を併せると、初期山形近代洋画界をリードした３者の作品が一堂に会したことになる。

本作品の調査にあたって、作者のご子息である為本六花治山形大学名誉教授にご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

参考文献

・山形新聞社・山形県美術連盟編集『山形の美術』山形新聞社、1964年
・山形県芸術文化会議編集『山形県芸術文化史』山形県芸術文化会議、1973年
・日本経済新聞社編「田口連三」『私の履歴書　経済人16』日本経済新聞社、1981年、78－155頁。
・村山鎮雄「峠の美術往来　山形＜毒地社＞の人びと」『繪』、日動画廊、1987年11月号～1988年3月号
・村山鎮雄「山形の近代美術－洋画を中心として」『やまがた街角』第27－31号、平成17－18年
・村山鎮雄『山形の近代美術－洋画を中心として－』印象社、平成18年
・軽部早苗「資料紹介　小塚義一郎≪加茂港≫」『山形大学附属博物館館報31号』2005年、4-5頁。
・村山鎮雄「山形の戦後美術二十年の歩み」『やまがた街角』第40号、平成20年、88-91頁。

（附属博物館　森谷 菜穂子）

「天地人」
Information Desk

いよいよＮＨＫ大河ドラマ「天地人」が始まった。配役や、ドラマとしての脚本にいろいろモノを申したいという方はたくさんおいでであろうが、山形に関係深い人物が主人公とあっては、県民の関心が高まるのも当然である。

さて、本館には「直江兼続」に関係する資料として慶長出羽合戦・奥羽の関ヶ原ともいわれ、兼続と最上義光が対決した長谷堂合戦を物語る貴重な資料「長谷堂城大手門扉」が所蔵されている。そのほか上杉藩の上級武士であった「安田家文書」の中に「直江状（写）」が１点、そして県内の往来物の中にも「直江状（写）」（御手本類については、本館報に石島庸男氏が寄稿）があり、直江状が計２点所蔵されている。

今回、安田家文書の方の「直江状（写）」を、ＮＨＫプロモーションが企画する2009年ＮＨＫ大河ドラマ特別展「天地人－直江兼続とその時代」（サントリー美術館・新潟県立歴史博物館の巡回展）に出品することとなった。

「直江状」については、存在そのものを疑問視する声もある。しかし、「直江状（写）」には振り仮名や読みにくい字を楷書に書き直した跡などが随所に見受けられ、「直江状」を心の糧として書き写し、後世に残そうとしたことがうかがわれると共に、「義」の精神を尊ぶ上杉藩士の想いが伝わってくる。

また、安田家文書を読んでいると、安田家が所蔵していた直江兼続の書状に対して、兼続が死んで126年後の延享２年に「直江書状を譲り受けたきにつき」「直江書状差上への礼状」などという文言が出てくる。上杉藩士にとって「直江兼続」という人物がどのような存在であったのかが偲ばれる事例であろう。

とにもかくにも、本館の所蔵資料が全国規模の展覧会に招聘を受けたことはうれしいことだ。

兼続が、秀吉や家康といった天下人と初めて相まみえた時の緊張感・心の高ぶりと同じように、大きな展覧会に本館所蔵の資料を貸し出すというのは「試される」ことへの期待と不安があるが、このような機会こそ「天の時」と地元の「地の利」を活かす好機と思い、本館の資料が全国の方々に見ていただけることを願う次第である。

（附属博物館　髙橋加津美）

平成20年度事業報告

平成20年度に本館で実施した博物館実習の単位習得者数は下記のとおり。

（単位：人）

学　　部	人　数
人　文　学　部	３３
地域教育文化学部	２３
理　学　部	２６
他　大　学	１
計	８３

公開講座は**「山形美術館の傑作たちPart３」**と題し、「美術館の傑作たち」シリーズ３回目として山形美術館を会場に開講された。美術好きの常連の方、「こんな公開講座があったとは」と新しく受講された方、多くの一般市民の受講により、好評のうちに閉講式を迎える事ができた。講師・演題は下記のとおり。

（　）内は講義で取り上げた作者・作品名

第１回	11月15日（土）
・関西のあじわい（北野恒冨≪阿波踊り≫） 山形大学　教授　宮島新一	
・シャガール　夢と現（マルク・シャガール≪逆さ世界のヴァイオリン弾き≫） 山形大学　教授　元木幸一	
第２回	11月22日（土）
・人間・新海竹太郎の魅力（新海竹太郎≪ゆあみ≫） 山形美術館長　加藤千明	
・≪サンタンリ村から見たマルセイユ湾≫について（ポール･セザンヌ）山形大学　准教授　阿部成樹	
第３回	12月６日（土）
・筆先の魔術師葛飾北斎－≪北斎漫画≫を中心に（葛飾北斎≪北斎漫画≫） 山形大学　教授　山本陽史	
・ルノワールの技法について（≪森の小径≫≪花帽子の女≫など） 山形大学　准教授　小林俊介	

特別展は、平成20年10月25日から12月14日まで（月曜を除く）、文翔館を会場に**「五百澤智也の世界Part２－五百澤智也が描くふるさとの山々」**と題し開催された。

以上のような博物館で実施した事業については、博物館のホームページで、随時写真入りで詳細にお知らせしていますので是非ご覧下さい。

平成19年度見学者総数

一般成人	個　人	603人
	団　体	85
大学生	個　人	1,322
	団　体	305
児童・生徒	個　人	34
	団　体	862
合　計	個　人	1,969
	団　体	1,252
	総　数	3,221

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報　№35　　2009.3発行
編集兼発行人　山形大学附属博物館
〒990－8560　山形市小白川町一丁目４－12
（TEL）023（628）4930（直通）
（FAX）023（628）4930
URL http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/
E-MAIL hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp